

久しぶりに奈良へ行こうとして、車にしようか電車にしようかと迷ったが、小雨も降っていたので車で出発した。目的は奈良国立博物館の特別陳列「お水取り」を見る事、友人の道子さんから「入場券をどうぞ、行けなかったらそれでもいいから・・・」と招待券をもらった。博物館の解説を紹介します。

奈良に春を呼ぶ行事とされる東大寺二月堂の「お水取り」は、正式には修二会（しゅにえ）といい、春を言祝（ことほ）ぐ仏教の行事です。夕刻に二月堂へ向かう練行衆の足下を明々と照らす「お松明（たいまつ）」がよく知られていますがその根幹をなすのは本尊・十一面観音菩薩に日頃の罪過を懺悔し五穀豊穡・除災招福を祈る「悔過（けか）」という儀式です。「お水取り」は東大寺の実忠和尚が天平勝宝四年（752）に創始したと伝えられます。それ以来「不退の行法」、戦乱や火災などの幾多の危機を乗り越えながら、様々な人によって支えられ、1262回の長い歴史を刻んできました。高名な「お水取り」は3月12日の深夜に行われますが、実際には2月20日から月末までの前行（別火べっか）、3月1日から14日（15日未明）までの本行を合わせ、約一か月間にわたりさまざまな儀礼が執り行われます。

これを読んで仏教寺院の横に鳥居が在り、ほら貝が在る、神も精霊も居そうな後ろに控える若草山は山焼きが終わったところなのか少し焦げている。雨上がり、木々の間に霧が立ち込め、モノクロ水墨の世界が広がる。この「お水取り」の松明は、火の粉が落ちる様をオレは見た事が無い、近い処に住んでいるがこの勇壮な火祭りは見た事が無い、「火祭りとは」と怒られそうだが、夜の闇の中、二月堂の舞台を駆け巡る燃え盛る炎の映像は何度も見たことがある、「火事にならないのかね」と心配しつつも、「すごい、あんな儀式があったのか、あつていいのか・・・」と今日も博物館の映像に見惚れた。

その後、せっかく来たのだから本物の二月堂に行ってみようという事になった。鹿の糞を踏まないように、敷き詰められた石畳を進み、南大門をやり過ごし「この仁王さんは本当に大きい、でかい」と感心しつつ右左を見る。外人さんが多い、聞こえてくるのは中国語、朝鮮語、英語、その他の外国語はわからないがとにかく外国人がたくさん来ている。大仏さんは2.3年前に見に来たが、二月堂付近を歩くのはもう何十年ぶりか、かすかな記憶で「大仏殿の裏では」と思っていたが実際には大仏殿の横を少々登った処、京都の清水寺ほど大きくはないが、山の斜面に建てられた舞台が張り出している。先日訪れた富山の城端（じょうはな）に在った浄土真宗の別院も荘厳な建物、彫刻された建物の木組み、「すごい物だ」と思ったが、東大寺のこの辺りは「隅々まで洗練され荘厳で簡素」と改めて思った。二月堂は今が「お水取り」の真っ最中、「台所かな」と思われる建物の屋根の窓からモクモクと煙、傍に行ってみるとたくさんの男たちが殺気立ち、米を洗い、米を蒸し、餅を搗き、搗き上がった餅を丸めていた。ガードマンらしき制服組も夜に備えあちこちに居る。なるほどこの「お水取り」は演出でも、ショーでも、土産物感覚でもなく、お寺の行事、お寺そのものなのだと思う。儀式なのだ。あちこちの面白い文字が見える「あれ」と近づくと榊嶺山先生の書があちこちに在る、「この東大寺で、先生、中々、儲けてますなあ」 大好きな壁、黄土色の土塀にみとれていると、溝の中、はがき大の白い板に文字「この溝に沢蟹が帰ってきて増えていますが、ところが野生化したアライグマが沢蟹を食べるので減ってきました。沢蟹はこの溝が住処です、沢蟹を獲らないで」 どんなすごい溝だと思うでしょうが、町の何処にでもありそうな小さい溝です、流れている水は山から来た綺麗な水でした。

大仏殿の中からきゃっきゃ女学生が溢れ出てきた、修学旅行かもしれない、今時東大寺にも来るんだと感心しつつ「何処から」と聞いてみると「宮崎」と明るく返してくれた「遠い処、ご苦労さん」と言いつつ、地震の時はこの子らは中学生かなと心の中で思っていたら「暑い処から寒い処へようこそ」と隣でぼそり「・・・？」オレは宮城と宮崎を間違えていた、最近よくある話、地震の話をしなくて良かったと胸なでおろし、ボケを認識。空海と最澄がごっちゃになり最近やっとその二者が聡明になった、今はイランとイラクがごっちゃになっている、空海のところ「イランとイラクは間違わないぞ、イランはペルシャだ、東側だ」と豪語していたのに、そのうちマネとモネが怪しくなれば、これは取り返しがつかないぞと危機感を募らせている。

富山の事を考えながらふと思い出したのが、“越中富山の薬売り”おじさんの背に背負われた“柳行李”土産にもらった“紙風船”(サイトを見ると土産は絵葉書風の版画だという、思い違いかそれとも紙風船か…)それらが鮮明に思い出された。「こんにちは、お元気ですか」とニコニコしながらおじさんが入ってくる、母親がにこにこしながら、居間の棚に置いてある薬箱を持ってくる、そのおじさんは担いできた風呂敷の大きな荷物を置く、玄関先に腰掛け、黒い大風呂敷を解き、何段重ねかの柳行李をひとつずつ開ける、我が家の薬箱の中身を点検して帳面に付ける、柳行李から色々な薬を出して、我が家の薬箱に入れてまた帳面を付ける「えええ、今年は〇〇円です」と言いながら我々子供に紙風船を一つずつくれる、赤や緑に色分けされた蠟紙製の紙風船だった。

“越中富山の薬売り”サイトより

先用後利:長期信用取引制度:お得意さんに先に薬を預けておいて、後に(我が家には毎年ぐらいの間隔で来ていたかな)使用した分だけの代金を頂くシステムは、現金収入の少ない時代には大変喜ばれ、富山売薬の発展、存続の大きな要因だった。

柳行李:売薬さんのトレードマークともいえる、重さは20キロもある。これを背負い毎日20,30キロの道のりを歩いたり、船便を使ったり、馬の背に載せたりして行商していた。

薬:原料の大部分は、中国、東南アジアから輸入した最高の生薬。富山の薬種商がそれらを仕入れ、売薬さんに販売していた。

先日富山に行った折、時間が在ったので近くを散策した。車で城端(じょうはな)という町と五箇山を巡った。五箇山の合掌造り集落は白川郷の合掌造り集落と並んで有名、以前にも来たことが在る。「五箇山に行ったのはもう10年近くも前になるのか」と思いました。澤山、猪熊、河瀬、高田、各さんたちと雨飾山に登った帰りだった、季節は麓では暖かく、山はまだまだ雪が残って、水芭蕉が真っ盛りだった。調べてみると2000メートル近くある山、おぼろげな記憶だが仲間の皆さんは麓の宿に泊った、オレは何処でテントを張ったのか忘れてしまったが登山口の辺りで寝たように思う。その野宿の光景が記憶が欠落している、思い出せない。朝、車で登ってきた皆さんと合流して、真っ白な水芭蕉が満開の木道を歩いた、ヒキガエル(蝦蟇)もたくさんいた。てっぺんまで登って「我々は元来た道を下るけれど、反対側を下ってみる」と言われ「行ってみようか」「我々は反対側の麓に行っていて待っているから」というような成り行きで反対側を一人で下った。人が一人もいない、不安がいっぱいの下山、道を間違えていないか、雪渓で転ばないか、仲間は反対側を登ってくるといううまく会えるか、怖がり、ビビリのオレの引きつった顔が目浮かぶ、その時仲間の姿、こういう場面は感激だねえ、嬉しかったねえ、一躍勇んでぐんぐん下った、まだまだ体力のある60歳ぐらい、10年前と言ったが6年前だった。

話はそれだが2月下旬の一番寒い季節、「雪国行く時は長靴だ、田中角栄は演説の時でも長靴だった」というように、我々関西人が普通感覚で普通の靴を履き車から降り立てば、足元は雪か雪解け水、たちまち靴が濡れてしまう。「ちょっと迎えに行くついでに散策だから」と普通の靴で出かけたが行く先々で雪に阻まれ、「こっちは行けない、あっちも行けない、雪かきに使った長靴を履いてくれば良かった」とそれこそ後の祭りだった。オレの富山お気に入りには建物、合掌造りだけでなく、何処に行っても広い敷地に堂々とした日本建築、黒い梁と柱、真っ白な漆喰壁、屋根瓦は黒く光る、板塀、土壁もある。建物と塀と門のバランス、意匠も考えられている、庭園も考えられている。以前同じ日本海側の町、間人(たいざ)に何度か足を運んだ、車で寝て絵を描いた。海辺に突き出た家並みは狭い土地をうまく使ってモトーン住宅がいくつも建っていた、積木状に上手く嵌まって右に左に並んでいた。渋い色の壁に屋根が落ち着いた佇まいを演出していた、素材は富山に比べ質素なもので、壁も屋根も板のようだった。土地によって豪華さ質素さが在るのは否めないが、江戸時代の殿様が富を呼んだのか、海運の拠点として栄えたのか、他所にない産業なり鉱物なりが在ったのか。今でこそ“裏日本”雪の多い処、過疎の地域、産業のない処、とみられるが、船での物流、物流の拠点、北海道から東北から富山へ、富山から松江、萩、下関、上関、大阪、京と海運が富を運んだ。それに魚が旨い、100円のアジフライでも、ものすごく旨い「もっと上等を言え」と言われそうだが、オレはアジ、サバ、イワシが好きなのだ。

相さん、前さん、垣さんと駅の改札口で待ち合わせ、5分前に着いたらもう三人は待っておられた、急いだが、昔は10分で歩き着けたが、と挨拶もそこそこに京都行に飛び乗った。嵐山駅に着いたのが8:30、「清滝までバスがあります、10分後に出ますが歩きますか」「歩く」と意見が纏まり清滝まで歩いた。鳥居の処までほぼ1時間、京都の有名な観光地をてくてく歩いて来た。これを読んでいただいている他所の方のために、サービスで名前を列挙しましょう。まず“桂川”を渡るのに“渡月橋”という有名な橋、少し行くと左手に“天龍寺”10分ぐらいで“嵯峨”の“小倉山”“落柿舎”“大覚寺”“大沢池”もうすぐ狭いトンネルを抜けたら清滝という手前に“化野念仏寺”まだ寒い季節の土曜日だけれど、もう観光客がぼちぼち出ている。

トイレの近くで登山の用意、電車の中から山を見上げたら上は白い、清滝までの道中も屋根の上に車の上とうっすらと白い雪、昨夜少し降ったようだ、おそらく1000メートル近い山頂は雪山だ、という事で、雨具にスパッツ、アイゼンは持ってきていないがピッケルは持っている。参道ではなく清滝川沿いの林道を歩いて月輪寺コースに決めていた。去年行き過ぎてしまったので、まだか、こんなに遠かったと不安になりながらも1時間弱で見覚えのある左からの流れと登山口、大きな字で月輪寺と書いてある、飴をもらいオレはケツに付いて登山開始。お寺に近づく辺りから雪がちらほら見え出し地面が白い、木の枝に葉の上に雪が乗っている、天気は快晴だが上の方が少し霞んでいる。「山頂には1時前になりそうですが、昼食はどうします」「上で食べましょう」「それまでこのおやつでもたせましょう」と戴いたのがチョコレートとどら焼き、旨いねえ、男はおやつを持ってこないが女の人のおやつは有難い、旨い。下を見ると嵐山辺りがよく見える、川も池もお寺も。山頂手前の1時間は少し曇って雪の世界、真っ白に雪が付いた木々の枝、皆さん「こんな雪は初めて」いたく感動されていたが、足もなかなか元気だ。

登りのコースはほとんど人と会わなかったが、昼を食べようと入った休憩所には大勢の人が飯を食べていた、表参道から上がって来たようだ、向かいに座った人は日本酒の四合瓶を傾けている、いささか酩酊気味だが気を付けて降りて下さいよと祈った。山頂の火の神さん、愛宕神社に寄り、トイレを借り大きな笑い声と共に参道を下った。

◎愛宕神社は、旧称“阿多古神社”だそうだ。神社の中に両方書いてあったので不思議に思ったがそういう事らしい。戦前は鉄道にケーブル、レジャー施設、宿泊施設がたくさんあって賑わっていたそうだが、今は神社参りを兼ねた登山者ばかりかな。参道を下りながら説明板が在ったので紹介。

◎茶屋跡：愛宕参詣道の起点、一の鳥居から愛宕神社までの50町の参道沿いには、多くの茶屋が設けられていた。この場所はちょうど真ん中の25丁目にあたり「なかや」という茶屋兼宿屋があった。店の女たちは「あたご山坂エー、坂エー坂、二十五町目の茶屋の嬢、嬢旦那さん、しんしんしんこでもと食べ、坂をヤンレヤンレ、坂エー坂エー坂坂坂」などと歌って参拝者を迎えたという。中略、明治の初めには茶屋は19軒もあった。

此処で休んでいると二人連れのおじさんがフウフウ言って登ってきた。電柱、電線の保守の人だそうで、「電線に木が垂れている・・・そんなん見て見ぬふりで行きましょう」「ここで1時間ほど休みましょう」とニコニコしながら茶屋の説明。「ここはお茶を出すだけの茶屋ですよ、以前、愛宕神社の神主に、せっかく登って来たんだから、精進落としは何処に・・・そんな茶屋は何処に・・・」と聞いたら、「此処はそんな神社と違うと言われた」と大笑い。何のことかわからない人の為に解説を。昔、男がお宮参りをする際、身を清め女気を断って一生懸命お参りをする、それが終わると、それまでの一生懸命の精進を落とすという事で、麓の茶屋で茶屋女とベトインをすることを、“精進落とし”という。昔はそんな楽しい事があったのですねえ。

◎ケーブル清滝川駅跡：愛宕山鉄道鋼索線（ケーブル）昭和4年に平坦線（嵐山、清滝）と同時に敷設された鋼索線は全長2キロ「東洋一のケーブル」と宣伝されていた。15年で撤去された。太平洋戦争への鉄の供出の為らしい。

帰りはさすがに、「バス」という事で時間表を見ると5分後の出発、待ち合わせの場所について、「打ち上げをしましょう」少々のアルコール。「次回又是非行きましょう」「展覧会終わったら、行きましょう」

◎竹田:戦いだけが秩序を決める、しかし覇権の原理はたいへん脆い。なぜなら、覇権の原理でともあれ王権が確定しても、時代と状況が変わると、現にある王より勢力の強いのが出てくる。すると「最強者原理」で王は選手交代すべしということになる、これでは権威として大変不安定。初めに最強者になった人間、普遍闘争状態を制覇したものは、まだいい。それはたいした事業で、なにしろその人物はとことん命を賭して戦って最後の勝者になったので、英雄であり、実績がある。それで誰もが彼の権威を認める。カリスマの支配。ところが二代、三代になると危うい、だんだん権威が無くなっていく。

◎本郷:鎌倉幕府の頼朝はカリスマでぐいぐい御家人を引っ張っていくけれど、二代頼家、三代実朝は権威が無くなってきた。実朝は朝廷から高い官位獲得して、朝廷の威光を借り御家人を従わせる、という挙に出ます。それが逆に御家人の反感を買った。「なんだ京都かぶれか」「おれたちの代表か・・・」ということで、源氏は三代で滅びる。

◎竹田:覇権の原理は一番強いやつに王権を委ねるが、そうするともっと強いのが出てくると「オレが王になって当然」ということになり、国家は不安定、普遍闘争という契機が常にはたらく。つまり覇権の原理が基礎です。しかしこれは生命と生活の安定を常に脅かすので、世界中どこでも、覇権がいったん成立したら、それを長続きさせるための様々な工夫が案出されている。その一番手が宗教的権威によって王権を正当化させる。さいわい人間社会には必ず何らかの宗教が存在している。王権が成立すると、王権が宗教に権威を与え、宗教が王権の正当性を権威づける。宗教的権威で一番重要なのは、教義が正しいではない、古くから続いている権威があるということが一番重要。

◎本郷:実質的に天皇政権が終わった、藤原氏のような実力貴族の政権になって以来、秀吉も家康も、その世界中でいう宗教的支えがすなわち天皇だった、日本だけが特殊ではないのですね。

◎竹田:後発近代国が自民族の特殊性を強調したがるのは一般的なこと、ドイツがドイツ民族の特権的な特殊性を強調しようとしたのも今から見れば何の根拠もない話です。どこの王権でも宗教的権威づけをしたい時には、教義の内実ではなく、時間的に長く続いているものを、利用する。

◎本郷:竹田さんに、ヘーゲルは「自由とは所有である」と説いている事を教えられた。僕は日本の中世は「所有権の未成熟」があると考えてきた。権威が未成熟だと、を過不足なく保証することは不可能です。日本は古代から中世まで所有権は常に脆弱でした。土地そのものでなく土地に対する権利、その権利の所有。現地で生活する武士、上には大寺社や貴族、その上に天皇家や摂関家、この「職しき」の体系を整備したのが古代以来の天皇、貴族でした。武士はこれを超える土地所有の論理を編み出す事ができなかった。そのため天皇、貴族が実権力を失ってもなお、長く京都に置いて君臨する事ができた。権力が土地所有の十分な保証を行うようになるのは、地域ごとに戦国大名権力が成立することによる。戦国大名の強力な権威のもと、職の体系はようやく存在理由をなくし、天皇、貴族も武士に優越できなくなった。「お上」が弱いから相互に所有を認め合う、これが自由なら、日本の中世はまさに自由の誕生と成長の過程。

歴史学者が、哲学者と対談している。面白い見かた、捉えかた、中世がますますわからなくなったが、面白そう。今日は先生らの話ばかりに終始した、それではオレはと、中世の人たちを扱った画像を探してみた。1000年という歳月が経っているけど、町の様子、町の景色、人の動き、人のすること、100年前とそんなに変わらない。この100年が変わりすぎ、その変わり方の加速度が付き過ぎている。先日作ったオレのチラシにこう書いた「世の中がどんどん変わっている、これは、世界が発展しているのではなく、病んでいるのでは、と叫ぶ人がいる」

展覧会まで後一週間となった、来週は展覧会初日だ。そんな今ごたごたが二つも重なった。

まず一つは「展覧会にアレを出そうかコレを出そうか」と迷いつついくつかを用意したが、「やはりアレを出そう」とまだ用意していない絵を探し始めた。去年と同様にA4両面のパンフレットを作った、品物は明日にも届く、パンフレットにその絵の画像を入れ、時間をかけて“レイアウト”を“文句”を考え推敲、ああでも無いこうでも無いと考え作った。ポストカードが1500枚で6000円、パンフレットが1000枚で1回の色校正込みで6000円。どの絵を載せるかという事にも時間がかかった。そのパンフレットにお気に入りとして載せた絵だ「やはりあの絵を展覧会に出そう」と探し始めた。20年30年と描き溜めた絵は、20枚位をぐるぐる巻き手が届かないような高い天井裏に何十本と並べている。「あの絵は去年の秋に収納した、2013のラベルの中に在るはず、すぐに探し出せる」梯子を出して1本2本と下し紐解き探し始めた「無い」「無い」1時間たち2時間経っても出て来ない。昼食を食べ河原へ行ってシャワーを浴び梯子に登って1本2本と下し紐解き探した。「まさか人に渡してない・・・」「売れた記憶が無い・・・」夜になって「見つからないか」「諦めるか」「まさか端っこの小さい絵のコーナーには無いよな」その2本を下し、2本目に在った、「やった、あった、うれしい」胸なでおろした時には疲れが「どっ」なれど「ほっ」だった。

二つ目は車、車が動かない、エンジンがかからない、キーを差し込み回すけれども「ツー」と小さい音、前日には四歳児、彼は間もなく五歳になるその彼を迎えに15キロほど心地よく走った、今日は四歳児を送るべく、荷を乗せ本人をシートベルトに懸けいざ出発の時にエンジンがかからない。「だめだ、電車で行こう」ということで歩き出した。四歳児といえども、大人の危機感を感じ神妙にトコトコ歩く、ごねずに素直に歩く、饒舌に話している「はいはい」「はいはい」駅に着き電車に乗って20分、次の電車に乗り換え10分、目的地の駅で降り「僕の家は00レジオランスだ、00番だ」と叫びながら意気揚々と家に着いた、こんなことなら、スムーズに歩けるのなら電車も悪くないと思いつつ帰りの電車に乗り往復2時間かけて帰った。翌日車のエンジンルームを開けバッテリーを見ると緑色のセーフマーク「それでは何が原因」思い出したのが20年前、画商の近藤さんとオレの車で北岳に向かった折、山梨県を南アルプスに向かってダムがある川沿いを走っている時「プツリ」とエンジンが止まってしまった。人家を探し電話を借りJAFを呼んだ。山奥なので3時間ほどしてやっと来た整備マン、エンジンを覗いて二、三手を動かすうちにエンジンがかかった。「ヒューズです、こんなことでお金を頂くのは恐縮ですが」と1万円程を請求された。そのあとすぐに登山口に着き目的のテント場で祝杯を挙げていた。今回もヒューズかと整備の本を見ながら蓋を開けた。昔に比べ20、30個ぐらわずらりと並んでいる、どれがエンジン用はわからないが、一つ一つ外して点検、ヒューズの焦げは無かった。任意保険の事を思い出し電話してみると、車・救急隊があるというのでさっそく電話、30分でレッカー車がやってきた。「バッテリーではない、他の処の故障」ということで半年前に車検を受けたオートボックスに牽引、自転車を乗せ助手席に乗り込んだ。オートボックスの整備マンが診て、預かるということで一先ず自転車で帰った。後刻の電話で「スターターが潰れている、その他は快調、スターター交換で5万円弱」ということで頼んだ、保険のレッカー移動は無料だった、ということで、車の件もひとまず決着。

物事がうまく行かない、進まない、不調だ、何故だ、どうしてだ、こういう事が湧き上がると、自身が停止してしまう。一つの不調が、仕様もない様が、たった一つの引っ掛かり、出来事が、日常の状態に不調がやってくると、自分自身が停止してしまう。こういう事はよくあることで、こんな事がと思いつつ、自身の人格の、行動の、思考のおおよそが止まってしまう。オレの生命活動というには大袈裟すぎる表現かもしれないが、日々の日常が素直に滞りなく順調に進めばそれに越した事はない。日常に起こる問題点、解決しなければいけない事、悩まなければいけない事、それらは日常の中での出来事、日常生活だけれど。「え・・・」「あれえ・・・」と持ち上がる問題点、オレにとって「範疇ではない事象」が起こってしまうと、オレは停止してしまう。今回も二つの問題が解決して、やっと日常に戻ったという下らない話しでした。

沖浦和光著<幻の漂白民・サンカ>田中洋美著<マタギを追う旅>を並行して読んで。

ニーチェ：国家とはもともと対等な実力者が互いを守り合おうと契約をしたものだ。ギリシャ市民たちもそうだ。国家ができた最初の段階で掟を破れば、そもそも社会契約そのものを破棄したことになるので、国家から追放されるか死刑かどちらかだ。特に戦争をしている時は、メンバーが固く結束しなければならない。そんな時にほんのちょっとした掟破りも「俺たちが仲間であろうとした約束、社会契約そのものを、お前は破棄した」という事で厳しい裁きが行われた。

こんな話は昔の事だ、中世や近代ならいざ知らず、現代、今時、と思うが、たかだか50年100年前の日本では行われていた事かも知れない。国家とは、市民とは、個人とは、と問われると戸惑う、即座に答えられない。所有が当たり前、金品、農耕地、住宅、を所有して、社会なり国家なりと仲間であるという契約をする、衣食住や、安全、治安、宗教、娯楽、文化、ここで止まればいいのに世界が社会が発展、発達、変化と急カーブの現代、と少し脱線。平易に考えれば、人間が居る、家族が居る、仲間が居る、社会が構成される、ここで問題、困難、不平、不満、が無く衣食住があれば人間どうしは争わない、戦わない、諍（いさ）かわない。奈良最大の寺、興福寺に“懺悔”という言葉が無数に並べた巻物が在るという、“懺悔”を象徴する仏像群が一堂（本当の堂の建物、焼失）に集って在ったという。時の権力者の一族が“懺悔”という言葉をずしりと重く受け止めていた事に驚く。あの時代に、このような精神世界、観念世界が存在したことに驚く。というよりむしろ、現代人が、我々が無さすぎるのかもしれない。山の民、海の民、彼らが放浪、漂白する、そんな人々をロマンチックだ、ドラマチックだ、と見るのはいいけれど、実際に50年100年前までそんな人々が日本にいた。ただ文献がほとんど無いそうだ、それに比べて普通の人々の文献、いわゆる古文書というやつは世界に類を見ないぐらいにたくさん残っているらしい、因みにオレンチのアトリエにも江戸期の古文書、主に兵法書が大きな箱に5.6個収納されている、大いに虫食いが来て読みづらいがそのまま積んである。というように上から下まで、役人も商人も百姓もたくさんの古文書を残しているようだ。

◎沖浦先生<行き倒れの資料>

山陽山陰地方で、天保期7年続いた冷害型凶作で、平時でも豪雪地帯のこの辺りの農山村に壊滅的な打撃を与えた。家を出て袖乞いをする体力のない老人と子供が居宅で死亡。まず村内で袖乞いに回って食を求めた、体力のある者は家を放棄して他出した、町に出て食を乞うた。彼らを「潰れ百姓」と呼んだが、大半は「行き倒れ者」として死んでいった。サンカの発生源についてはこの7ヶ年にわたる大飢饉と一揆、それらが複合要因となって「サンカ」と呼ばれる「無宿非人」が増えたことには間違いない。ここで注目されるのが、この地方では、革田（非人）がサンカの取り締まりに熱心でなく、手を抜いているのではないかという庄屋の指摘。サンカと呼ばれる漂白民を、被差別の立場にある者として、人間的な思いやりのある心が作用して手を緩めたのだろう。革田（非人）彼らの集落を街道の要所に配置して、盗賊制止、治安維持、警護役に当たらせている。村が、警護道具の所持を命じ、捕り方武術を習得させ、費用を持った。

◎マタギ山の法<狩りの決め事>

：クマが獲れたら適当に解体して村まで運ぶ。四肢の付いたままの動物を集落まで持ち込んではいけない。肉の分配の前に水垢離を行った。小さな声で山の神に感謝を唱えた。北海道のクマ狩り、北欧のクマ狩りでも、クマに感謝、クマの精霊に感謝、山の神に感謝というのが見られる。

：50年100年前まではクマ、カモシカ猟は生活を支える重要な現金収入だった。

：奥羽の山にはマタギと謂って狩りを主業とする特別の村があった。冬になると、峰づたいにクマを追いながら、信州辺りまでも漂白してくると聞く。マタギは冬に山に入り、雪の中を幾日も旅し、クマを獲ればその肉を食い、皮とクマ膽（きも肝）を付近の里に持ってきて穀物と交換して山の小屋に帰る。

中央アルプス、晩秋の2000メートル辺り、真っ黒の犬が雪の斜面を駆け下りるのを見た。「こんな処に犬・・・？」

14-022 展覧会 260314

展覧会、会期の半分が終わった、今週は天気予報では晴れ続きのはずだったが、今日は一日中雨が降ったが、傘をさしてたくさんの方が見に来てくれた。下記のような解説文を絵の横に貼りつけています。

◎歩くひとたち 090913-20

リュックを担いだ3人の人が歩いています。我ながら、見事にその具象性は消え去り、紫色が残りました。サインの横の数字は、絵が出来上がって、サインを入れた日付です。例えばオレの誕生日で言いますと、15日12月1946年を151246と数字を入れ、TAKAとサインをします。

◎わたしはわたし -20

考えてみると、もう半世紀近く絵を描いています。アトリエにいて「この絵は上手く行きそう」と思いながら、最後の一笔で、「できた、いい・・・」叫べるようなことは、年に一回ぐらいですねえ。あとの絵はだめですねえ、またやり直し、もう一度、やり直し、このような連続です。そう簡単に微笑んでくれません。叫んだ絵は、いつ見てもいいが、どの絵かは言いません。

◎わたしとわたし 020513-40

2枚のキャンバスに描く、左右に人が居て、お互いを見えています、愛しいのか、憤怒なのか・・・両側から中に向かって描き進む。ただこれだけの事ですが、この形式のキャンバスを前にすると、いつも迷わずに描き進められる、成功する。この絵は縦の20号を2枚合わせていますが、合わせ方はいろいろ。この絵以外にいくつも描いています。

◎“わたしはわたし” 151213-30

人の顔を主題とした絵をたくさん描いています。最近は特に気に入ってこの主題の絵ばかり描いています。顔と言っても、自分の顔なのか、あなたの顔なのか、わからなくなって久しく、形象としての顔の形を借りて、抽象化して描いています。とは難しい言い方ですが、直線、曲線を使って、顔を意識して、顔らしきものを描いているだけです。

◎歩く人 020913-30

走る人、歩く人、この絵は、一人の男が、画面の右から左に向かって、進んでいる様を描いています。何処に行くのか、何故行くのか、本人に聞いてください。この絵、描きながら、赤紫色を入れた時、上手く行きそう、と感じました。

◎キング 120913-30

キング：王様が仁王立ちの様子、と言いながら、幻想かも知れないし、自身の中で、雄々しい権力者への恐れと憧憬が在るのかも。何年前に描いた絵を、又、出して、「エイヤ」と潰し、白色絵具を塗り、青色絵具を入れた。オレは、“今”が好きなのですね、ひよっとしたら昔の絵もよかったかもしれないのに・・・。

◎わたしはわたし 271113-30

この絵は出来上がるまで、苦勞しました。

白いキャンバスに、青色と、少しの色で、さっさと、描いてあるだけではないの・・・。

そうです、さっさと、描いてあるだけ、ですが・・・。

その、さっさと、が、なかなか、上手く、いかないのですよ。

わかりませんよね・・・。

気候がいよいよ春めいて暖かさを感じる。シャツを重ねその上にセーター・ダウンジャケット・ウールの帽子を深々と被り、ぞくぞくする寒さに耐えていた先日までが嘘のようだ。暖かさも寒さも過ぎてしまえばけろりと忘れる、そんな事があったのか、「本当にそんなに寒かったか」不思議がるほど人は振り返らないものかと可らしい。

展覧会もいよいよ終わりに近づき、恒例の1000円パーティも終わった。去年は同級生の仲間がテーブルの上を用意をしてくれ、今年はアトリエの仲間が用意してくれた。

展覧会に来てくれた石田君「一年ぶり」と再会後「オレ携帯持ってない」とのたまう。正にいよいよ昨今はオレの周りで携帯電話を持たない人が居なくなった「私の知人で持たない人が居るよ」という話は聞くが「持ってない」と直接聞いたのは珍しいとかびっくり、同志が居たかと大袈裟に感激、ただついでに頓珍漢な事もおっしゃる。「パソコン使えないので、携帯持っても仕方がない」

展覧会の為にと半年前から3号6号(A4, A3 ぐらい)の大きさの絵をたくさん描いた。普段は20号~50号がほとんどで3号6号は描かない、描けない大きさ、「うまくできない」と途中放棄、失敗とたくさん重ねて置いてある。そんな失敗作と新しいキャンバスを並べ描きだした。展覧会に出してみよう、見せよう、売りたい、そんな雑念が感性を刺激して、「うまく行っている、見せられる・・・」と嬉しくなるような小品が20点程出来上がったのは雑念の勝利か。毎日のように出かける安威川河川敷、小1時間ぐらい走ります、何年か前まではよその人と同じぐらいの速さで“すたこら”走れた。昨今は「速足の歩きよりは早いけど」と言い訳をしなければいけないような速度になってきたが、それはさておき、その走っている最中の事、特に帰路が多いのだけれど“何も見てない”“何も考えていない”“ただ時だけが流れる”という事がよくある。山登りでも同じだが、息が切れ“はあ~はあ~”“ぜえ~ぜえ~”と喘ぎながらも意識は、“無の状態”になる、「そんなに格好にいいものか、ただ“ぼおっ”としているだけじゃないの」言われるかもしれない。話は脱線したが、作品造りも、芸術生活も、日々の行動も、思考も、“ぼおっ”が大事、何も思わない何も考えない事が最重点項目かもしれない。

来廊御礼 2014年3月 岡村隆久

この画廊での個展、もう四回目になります。 /嬉しいことに、最近なんだか、絵が描けるんです。

迷うことなく、軽々と、絵が描けるんです。 /こんなことを言いながら、昔の絵を引っ張り出して見ると、 /「これはこれで描けているのでは・・・」という場合と、 /「これは恥ずかしい、これではいけない」という場合があります。一日、二日、描けなくても悩むな、時間はたっぷりある、ゆっくり行こう、 /開き直ると、筆がスイスイ進みます。抽象画は難しい、と言われますが、オレの絵は簡単ですよ。 /テーマは、10ぐらい、在るか、無いか。

「わたしはわたし」という顔の絵。 /「サイクリングヤロウ」自転車・バイクに乗る絵。

楽器を奏でる絵。 /走る絵、人が走る絵、オレが走る絵。

こんな具体的な事柄を、オレの脳みそを通過して、あんな形、あんな色、になります。

五千年ぐらい前の絵文字、形象文字と同じですよ。 /エジプト文字や、漢字で、魚や馬の、絵文字を見たことがあるでしょう、あれですよ。

絵文字が、どんどん形が崩れて、オレの絵になります。 /具体的な事柄からスタートしないと、描けないのです。 /だから、街やら、人やら、をスケッチしています。

あんな絵なのに、街をスケッチしたり、人をスケッチ、しなくてもいいのでは・・・。

それでも、街やら、人やら、をスケッチしないと、描けない、スタートできない。

出来上がった絵は、抽象画になっています。

見ていただいてありがとうございます、これからもよろしくお願いします。